

氏名	中井 章人
ヨミガナ	ナカイ アキト
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第566号
学位授与年月日	平成30年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉 想像する生き物“人”が生み出す正体不明の仮想現実 〈作品〉 ラプラスの夢 鏡面的パラミリア 私たちは $gf^{\wedge}4d.sz$ の中にいる 無矛盾の輪は同時に存在することができない 〈演奏〉

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	坂田 哲也
(論文第1副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	佐藤 道信
(作品第1副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	工藤 晴也
(副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	秋本 貴透
(副査)	東京藝術大学	准教授	(美術学部)	齋藤 芽生
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	

(論文内容の要旨)

人がもつ際限なき好奇心と科学の剣は、この世のあらゆる事象を見極め、切り捨て、カテゴライズしていく。

“現実”と呼ばれる含みのない硬質なりアリティは、この世の謎や不可思議をことごとく取り払い、想像の余地を奪い去っていく。その姿は私を酷く落胆させ、息苦しくさせる。そして、幼少期に夢見たファンタジーな世界やヒーローといった空想でさえも、退屈な現実塗りに潰されるがごとく色褪せてしまう。しかし、人は、想像する生き物である。想像という名の絵具を用いて退屈な現実を次々と被覆していく。今や、ゲーム、漫画、ライトノベルなどの創作物は、日本を代表するカルチャーとして広く知られる存在となりつつあるが、これらは退屈な現実世界から逃避するために作られた架空の理想郷としての役割を果たしている。想像によって生み出された創作物や仮想現実親しみをもち、“インターネットと現実の世界を対立するものとしては区別しない世代”とされるデジタルネイティブの人々。本論では〈デジタルネイティブ〉と呼ばれる世代区分をベースに、より狭義な区分として〈ゲームネイティブ〉を設定した。現実と非現実の間をシームレスに行き来する彼らは、非現実世界のキャラクターに自己を投射し、現実と距離をとることで現実世界への不満を解消する。その姿はまるで、退屈な現実という疾病を治癒させようとしているかのようだ。

本論では、想像の源や原理に触れながら、それが現実世界に及ぼす影響と作品に与える効力について考察した。古来より人々は、想像により、沢山の物語を生み出してきた。たとえば、夜空に散りばめられた無数の星々の並びから、神々や動物などの姿を想像し、「星座」という見立ての図像を結晶させていった。こうした見立ての創作物は「神話」「伝承」として広まり、人が現実の星々を眼差す際にはこれらのイメージがまとわりつくこととなる。そして、人の記憶でさえも、様々な心理作用によってそのイメージは美化され、脳内で再編される。このように、記憶や想像は人の心理に即して変化し、歪められ、ときに現実を凌駕する魅力を放つ。また、想像を歪める要因の一つであるレッテルは、純白の百合

によって「純粹」を意味する花言葉が想起されるように、人の想像を誘導する強いバイアスとして作用する。一方で、特定のイメージを持たない不確かなフレーズは、人それぞれの想像の枝葉を広げる作用を持つ。本論文中に登場する、“存在しなかった物語や、存在するかもしれない出来事”、“ありもしなかった現実や、存在しなかったあれこれ”は全て、こうした謎や曖昧さをきっかけとして発現した想像という名の創作的観測術である。

これらは、“想像という名の絵具を用いて人の脳内に絵を描くことは可能か”という問いかけに対する答えを求める試みであった。人は誰もが絵を描く。想像の、理想の、忌むべき、待ち望んだ、それぞれの絵を描くのだ。それも心の中で、脳の中で。

本論は絵画論である。ただし、表層的な具象絵画論ではない。絵画として描かれた大樹はときに人であり、食物であり、未知のあるいは既知の大樹でなければならない。“描き手と受け手の想像によって結ばれた正体不明の図像”、それこそが理想の完全結晶であると確信している。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、「想像という名の絵具を用いて人の脳内に絵を描くことは可能か」を問う筆者が、様々な想像(解釈)しうる仕掛けを画面に施しながら、「正体不明の仮想現実」を構築していく創作論を述べたものである。

筆者がまず前提として述べているのが、自身が1980年代以降に生まれた「デジタルネイティブ」の世代であり、現実と非現実をシームレスに移動する世代特有の“特殊技能”をもつこと。そして両者を区別せず、“現夢混濁”の二面性を時に一種の逃避行動として利用してきたその機能に、筆者は逆に表現上の積極的な機能を持たせようとしていることが述べられている。そのため第1～3章では、想像の論理と、観者の想像を少しずつ誘導していく仕掛けについて、多くの事例から説明している。

第1章「想像が創る物語」では、地球からは見えない月の裏側、星の配列に意味を見出した星座、謎が謎を呼んでいった「モナリザ」などを例に、想像が不可知を埋めていく論理について述べる。第2章「想像により美化される現実」では、認知心理学を援用して“記憶”の側の変化を分析する。初めてルーブル美術館で見て以来、筆者の中で著しく美化されていったレオナルド・ダ・ヴィンチの「洗礼者聖ヨハネ」。妹という存在に憧れを抱くスタッフ(妹のいない)を集めてつくられたゲームアプリ「グランブルーファンタジー」の妹キャラクター・ヤイア。期待が効果を増幅させていった水晶などのパワーストーン。神を示唆する聖なる光に、靈魂を意味するオーブの光など、なるほどと思わせる事例解説が続く。第3章「誤認」では、“レットル”が持つ(生む)効果について述べる。花ことばや、色がもたらす寒暖の印象(赤と青など)、モチーフの数がもたらす意味変化(存在、対比、関係、規則性など)、形の意味と素材のギャップ(柔らかい布の形の大理石など)、自動車の前面に人の顔を見てしまうシュミラクラ現象(類像現象)など。実際にはここが筆者が画面に潜ませている仕掛けの種あかしともいべき部分であり、続く第4章「自作について」で提出作品を解説している。

筆者が描く作品は、宇宙のようにも水中のようにも、またネット空間のようにも見え、小さな白点も星や泡、電子の光のようにも見える。筆者によればまさにそれが狙いだという。また精緻に描き込まれた画面全体を光沢のある表面とした仕上げには、真珠の仕立の家に育った自身の記憶が反映されているらしい。

本論文のよみやすい文体による流れるような文脈と構成は、作品だけでなく言説による自身の説明(あるいは表現)にも、筆者が高い能力をもっている様子を窺わせる。同時に宇宙や鉱物(宝石)、コンピュータシステムなど、理系的な内容も含む文理のバランスがとれた独特の論述になっている。学位にふさわしい優れた論文として、審査会の高い評価を得た。

(作品審査結果の要旨)

「ラプラスの夢」と題された博士後期課程修了作品は、縦1455mm×横4480mm、同形4枚のパネルを組み合

わせた油彩画作品である。フランス人数学者ピエール・シモン・ラプラスの名に因んだ作品名であるが、この数学者の学説「ラプラスの悪魔」への異議を自作によって証明しようとする挑戦的意味合いを持つ作品である。その理論は、4章で構成される博士学位申請論文「想像する生き物“人”が生み出す正体不明の仮想現実」で詳細に論述されている。

本作品は、暗闇に浮かぶふたりの女性像を中心に、周辺にはクレマチスの花々が散りばめられ、画面全体に仄かな青い光が不規則に差し込む不思議な世界が描かれる。女性達は闇に浮遊し、一方は鏡に映った虚像のようで輪郭が幾重にも重なり、青い光は焦点を紛らわすように女性達を遮る。そこは深い海の底なのか、銀河の広がる宇宙なのか、或いはあの世の光景か、鑑賞者は空間の闇に引き込まれながら想像を巡らせ、描かれた図像の意味を探ろうとする。この難解な図像とは裏腹に作品自体は美しく存在感がある。西洋古典絵画技法を基礎にしながら独自の表現技法を研究した成果が遺憾なく発揮され、重層構造の彩色とワニスによる透明な最終層は極めて平滑で宝石のような輝きを持つ。このように本作品は、謎めいた難解な絵画であり、高度な技術を駆使した美しい質感の絵画である。この二面性は、鑑賞者に効果的に機能し合い、絵画としての魅力を高めながら表現として作用するのである。かつて文盲者の多い時代、絵画は言葉の役割を果たし、絵に描かれた主題を通して人々はその意味を理性と想像によって理解した。一方、人間は本能的に美しいものを眺めることで心の充足を得、喜びを感じることができる。本作品には、理性と想像力を活性化させる謎と本能を掻き立てる美しさがある。学位申請論文の中で、“描き手と受け手の想像によって結ばれた正体不明の図像”、それこそが理想の完全結晶である。と述べているが、「ラプラスの夢」はその主張を十分に証明する作品として認められる。

以上の通り、博士後期課程修了作品「ラプラスの夢」を高く評価し、審査委員全員の一致により、単位取得作品として認めるものとする。

(総合審査結果の要旨)

本論文及び作品の作者である中井章人は、東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程油画研究領域の学生として第六研究室に所属している。本論文の主題にある正体不明の仮想現実を様々な角度の論証や参考作品で創作論を解明し、論述していったものである。油画研究領域の王道とも言うべき油彩による四曲一隻の作品（F80号×4）を含め、四枚の作品で展示構成し、独自の絵画表現を創出した。

中井章人の本論文は“人は想像する生き物である、想像という名の絵の具を用いて退屈な現実を次々と被覆していく”その過程を自身の作品に影響を与えた文献や参考作品、それに付随する第一章第一節の裏側から第三章第三節赤い服のメリーさんまで天文学からダ・ヴィンチ論まで幅広く検証考察している。第四章で自作の制作論に結ぶ。ことに主作品である「ラプラスの夢」では、フランス人天文・数学者のピエール・シモン・ラプラスの名前を作品題目にし、この天文学・数学者の「ラプラスの悪魔」という学説を肯定できない疑問として博士修了の絵画のテーマとし、「庭」から「夢」と改題し、両方を受け入れるという解釈によって作品制作がなされた。

濃紺の天空の中にナランキラスの実を戴冠した女性がたうとうように浮かび、その身体は差し込む光によって乱反射し二重三重に写り込んでいる。鏡面を想わせる透過（グレース）で得られたワニスの奥に驚異の描写による身体が現れる。コスチュームは女性を包み、その途方も無いレースの刺繍の描画はさりげなく全体に溶け込んでいて、雄大な大気の中にある。その中をクレマチスの花“美しい精神”が画面の中を横ぎるように散りばめられている。

写真とみまがうような超絶的な描写は言うに及ばず、大げさに言えばルネサンスの神秘性もバロックの物語性もラファエル前派の華麗さをも内包したような豊穡な絵画性は博士修了作品の域を既に超えている。画面中央の斜めの光は効果的に濃紺の空間の中にリズムを刻み、遠い遠雷のようにも見える。この妖艶なる表現は私の経験知において他に類を見ない。今回の査読審査会は徐々に進んで行く作品の批評と同時に進行したことを付しておく。

作品は本論文の中で“描き手と受け手の想像によって結ばれた正体不明の生き物”このテーマが中井作品を貫く切実な理由であることがわかる。ここに至るまでの共感こそが中井君が目指す理想の絵画感

である。これにより論文と作品が合致し、一つの理想に辿り着いたと言えよう。

絵画における奥深さと華麗さと神秘性を湛えた作品は既に一人の美術家として歩んでいる。画面を覆う透過した絵肌の奥に緻密な描写がある。画面全体の色彩の発色も輝くように美しく見る側を魅了している。繋がり合う仮想と現実が鑑賞者の目前に繰り広げられるのだ。

中井君渾身の集大成作品である。大学美術館の展示会場はさながら中井ワールドと化していた。論文主査である佐藤道信教授もその作品の持つ華麗さと精緻な論証、的確な検証図版、読みやすい文章であるとその内容を高く評価され、作品主査の工藤晴也教授、副査の秋本貴透教授、齋藤芽生准教授の審査員も同じく評価された。よって博士修了論文「想像する生き物“人”が生み出す正体不明の仮想現実」及び、修了作品「ラプラスの夢」は課程博士の学位論文作品に相当するものとされた。故に全員一致で合格と判定することにした。